

剣道における礼法の一考察

小森富士登

Consideration of etiquette in kendo

Fujito Komori

I. はじめに

日本文化の1つである剣道は昭和20年(1945)第二次世界大戦後、連合国総司令部(GHQ)により学校武道は全面禁止され、さらに昭和24年(1949)黙認されていた警察剣道も禁止され、占領下におかれた日本では剣道は抑圧されていた。しかし、昭和25年(1950)に全日本撓協議連盟が結成され、新しいスポーツとして撓競技が行われるようになり、学校体育教育の教材として採用された。

その後、昭和27年(1952)に全日本剣道連盟が結成され、昭和29年(1954)に両連盟は全日本剣道連盟に一本化された。翌年の昭和30年(1955)には、日本体育協会への加盟を認められ、第10回国民体育大会に剣道が正式種目として組み込まれた。

また、先人の努力により国境を越え世界へ普及発展し、世界各地で剣道を愛好する剣道家たちの要望により、昭和45年(1970)に国際剣道連盟(IKF、2006年5月FIKに変更)が設立され、同年に国際剣道連盟の主催で第1回世界剣道選手権大会が東京(日本武道館)で開催された。この大会は、3年毎にアジア・アメリカ・ヨーロッパの各ゾーンの持ち回りで開催され、第14回大会(2009年8月)がブラジル(サンパウロ)で行われ、剣道は日本を代表する伝統文化として国際的に認知され、それとともに各国においても国際大会も行われるようになり、技術的にも国際大会に相応しい規模にまで発展してきた。

一方、日本では武道(剣道)は「礼に始まり礼に終わる」と強調してきたように、近代以降の剣道においても礼儀作法は非常に重要視されてきた。

全日本剣道連盟は、剣道の理念として「剣の理法の修練による、人間形成の道である」としている。剣道は人間形成の有効な手段として教育界にその根をおろし知育・体育さらに道徳教育の一環として考えられ、昭和33年(1958)に中学校学習指導要領の中の「格技」として位置づけられ、平成元年(1989)には「武道」と名称が変更され、2012年(平成24年)には全国中学校での正課授業として必修化される。

しかし、現在の剣道試合において、礼儀作法が疎かにされて乱れている傾向が見

られる。実際、剣道試合当日の審判者会議においても、礼儀作法が間違っていれば主審がやり直しするように指導され、それを行っている。

本研究は、剣道の歴史・礼儀作法の意義を考察・検討し、剣道指導の再考の契機とすることを目的とする。

Ⅱ．剣道の歴史

弥生時代後半に大陸から伝来した銅鉾や銅剣などは、日本で最初の金属製の刀剣である。これらは、武器として使用されたものであるが、やがて権威の象徴としてや神器とされている。三種の神器の「草薙剣」は有名である。そのほか全国の神社には刀剣が神宝として献納されている。

平安時代後期頃に、直刀から改良が加わり鑄造りの外反りの彎刀(日本刀)が発明されている。この日本刀の発明により、剣法の改変や日本独自の剣術が発達を促すこととなったのである。

16世紀後半には幕府の権力が落ちると戦国時代と移り、戦法や武術の工夫錬磨が盛んになった。このような背景のもとに、当然のごとく流派も誕生したのである。この時期の代表的な流派には、卜伝流、香取神刀流、念流、中条流、陰流等があげられる。各流派での剣術の鍛錬に用いられたものは、木刀や刃引きの刀などである。

そして、慶長時代には袋竹刀が発明され使用されていることは、剣道史上に重要な意味を持っている。

江戸時代に入ると、身分制度が設けられ武士以外は帯刀は禁止されている。禁中並びに公家諸法度(1615年)、武士以外の帯刀禁止令(1616年)の発布により、武芸は武士階級のみ許され発展したのである。

江戸時代の最大な特色として、文武両道の武士道の発達があげられる。戦を目的にしていた剣術から武士らしい人間形成を目的とすることに発展したのである。このことに大きな影響を与えたのが儒教学者の山鹿素行・貝原益軒などや沢庵禅師の「不動智神妙録」・宮本武蔵の「五輪の書」・千利休などによる茶道の完成などがあげられる。武士道は仏教や儒教及び茶道などの影響を強く受けている。

剣術の修練法は、形稽古から袋竹刀での稽古も行われ、18世紀の中頃から直心影流や一刀流などで竹刀と防具を使用した竹刀打ちの稽古が行われ、隆盛を成していった。これが現代剣道の基とされている。

明治維新により、藩籍奉還、廃藩置県、庶民の帯刀禁止、廃刀令が発令され、武士社会の特権はすべて消滅した。その後、榊原謙吉らが考案した撃剣興業が行われた

が長続きはしなかったが、西南の役での抜刀隊の活躍で剣道の価値が見直され、警視庁の警察官や次第に一般社会にも普及し行われるようになった。

1895年に大日本武徳会が設立され、諸流派の形を統一し大日本剣道形を制定している。また、各地域にも支部を設置し剣道の普及発展を目指している。

武道家の養成するために、大日本武徳会には武道養成所、武道専門学校の創設、1913年には、東京高等師範学校体育科に武道専攻科が設置されている。

また、「西の武専、東の国士館」と言われたように、私学の国士館専門学校でも武道家の養成を目的とした教育を行っている。このように、学校や一般社会でも盛んに行われるようになり、1931年には中学校の体育の正課となった。

しかしその後、世界大恐慌(1929年)が勃発し、これにより日本経済は大打撃を受け、これを打破するために帝国主義的独裁体制が強化され、軍事力をもって大陸へと進出したが満州事変・日華事変・第二次世界大戦と日本は戦時体制となり、剣道は戦の技術として利用された。

昭和20年(1945)第二次世界大戦敗戦により、連合国総司令部(GHQ)により学校武道は全面禁止され、さらに昭和24年(1949)黙認されていた警察剣道も禁止され、占領下におかれた日本では剣道は抑圧されていた。しかし、昭和25年(1950)に全日本撓協議連盟が結成され、新しいスポーツとして撓競技が行われるようになり、学校体育教育の教材として採用された。その後、昭和27年(1952)に全日本剣道連盟が結成され、昭和29年(1954)に両連盟は全日本剣道連盟に一本化された。翌年の昭和30年(1955)には、日本体育協会への加盟を認められ、第10回国民体育大会に剣道が正式種目として組み込まれた。

また、先人の努力により国境を越え世界へ普及発展し、世界各地で剣道を愛好する剣道家たちの要望により、昭和45年(1970)に国際剣道連盟(IKF、2006年5月FIKに変更)が設立され、同年に国際剣道連盟の主催で第1回世界剣道選手権大会が東京(日本武道館)で開催された。この大会は、3年毎にアジア・アメリカ・ヨーロッパの各ゾーンの持ち回りで開催され、第14回大会(2009年8月)がブラジル(サンパウロ)で行われ、剣道は日本を代表する伝統文化として国際的に認知され、それとともに各国においても国際大会も行われるようになり、技術的にも国際大会に相応しい規模にまで発展してきた。

Ⅲ. 武道礼法の歴史

武道は「礼に始まり、礼に終わる」と言われている。剣道の教育においても、礼儀作

法を重視している。礼儀作法、礼儀、作法、礼法など様々に使用するが広辞苑によると、礼儀とは、敬意をあらわす礼法・礼の作法。

作法とは、事を行う方法・起居・動作の正しい方式。

礼法とは、礼の作法・礼儀。

となっている。礼儀と礼法は、礼の作法を意味している。作法は、礼には関係なく起居・動作の正しい方式である。

武道の礼法の歴史は、仏教伝来(日本書記では、仏教が伝来したのは飛鳥時代の552年(欽明天皇13年)に百済の聖明王により釈迦仏の金銅像お経論他が献上された時とされているが、現在では上宮聖徳法王帝説の元興寺伽藍縁起等を根拠にして538年の説が有力で歴史教科書ではこちらを記載している)から始まり、奈良時代・平安時代は、様々な仏教が発展し、国家や貴族のための儀式として主流をなしていた。しかし、鎌倉時代になると武士が貴族から権力を奪い力を持った。この時代に中国より禅宗(臨済宗、曹洞宗)が伝えられ武士に好まれていたことは、鎌倉に禅寺が多いことで推測できる。

南北朝・室町時代になると、武家と仏教界の接近は貴族文化や武士文化に大きな影響を与えた。室町幕府第三將軍足利義満時代には、「武士の礼、武士の作法」が重要視され確立されていた。

また、この時代に禅宗の茶の湯の影響を受け、千利休などによる茶道の完成によって礼儀作法も武家社会に影響を及ぼした。このようにして、室町時代に「武家礼法」として完成された。礼法は、軍礼に限らず常礼においても、武士として守るべき礼儀作法があり、また武道の修練の中にも礼儀作法は厳しく位置付けされ確立されていた。武家社会の日常生活そのものが「武即礼」であった。従って、武術の修練を行えば自然に礼儀作法が身に付き、武士の守るべき秩序や道徳が身に付くように整理されていたと思われる。

このようにしてできた礼儀作法の伝統を守り続けてきた結果、現代においても武道を修練すれば礼儀作法が身に付くと言われているのである。

Ⅳ. 剣道の礼儀作法の考察

1). 礼儀作法は、相手に敬意をあらわすものであるが、武道の礼儀作法には護身(敵対動作)を踏まえた作法が多く見られる。

例えば、「正座をするときには左足から座り、立つときには右足から立つ(左座右起)」や「正座の礼法で座礼を行う時、左手を先につき、利き腕の右手を後につき頭を

下げる。頭を上げる時には、右手を先に戻しその後に左手を戻す」

他にも、「剣道衣の着用法では左手から通し、袴を着ける時は左脚から通す」、「剣道具の小手をつける時においても、左手からつける」、利き腕である右手（右脚）は、油断を怠ることなく着用する。

脱ぐときには、「利き腕である右手（右脚）を先に脱ぎ、その後に左手（左脚）脱ぐ」などがある。

このように、武士の社会においては、礼をおこなう相手に対しても油断を怠らない敵対動作によって組み立てられていた。

左座右起の作法は、すでに現在の一般社会でも定着しているが、正座の礼法で座礼を行う時、左手を先につき、利き腕の右手を後につき頭を下げる。頭を上げる時には、右手を先に戻しその後に左手を戻す。この方法は、武道をおこなっている人には理解できるが、武道を行わない相手には「敬う心」が伝わらない可能性があり得る。

そこで、礼法は直接相手を目の前にして行うことであるから、相手への影響も考慮し一般社会で行われている礼法の指導が望ましいと思われる。武道をおこなう際の作法は、護身を目的にしている直接に相手には影響を及ぼすものではないので伝統文化の一つとして守り続けていくものであると考える。

2). 剣道大会において、第1試合の開始時および決勝戦の開始時と終了時に行われている「正面への礼」は何処になされているか不可解な面がある。

全日本剣道連盟の「剣道試合・審判・運営要領の手引き」では、「選手と審判員の正面への礼に対する審判長の答礼は、大会の申し合わせによる」となっている。大会の申し合わせにより審判長が答礼を行えるのである。剣道大会によっては、審判長が答礼を行ったり、審判長が役員席の後ろに掲げられている「国旗」や「正面の壁」に対して礼を行ったりして様々である。

選手と審判員は、大会会長席を中心とした場所に向かって礼を行っているのである。審判長が答礼を行わないならば、何故に大会会長席を向かずに関員席の後ろに掲げられている「国旗」や「正面の壁」に対して礼を行っているのか理解する事ができない。

全日本剣道連盟発行の「剣道和英辞典」には、正面を「大会会長席を中心とした場所」としている。そして正面への礼については、「正面に向かって行う礼」と説明しているにもかかわらず、実際行っていることは違っていることもある。

そもそも、剣道の修業を行う場所は道場であり、稽古前・後に清掃を行い場内を清め、道場の中央には神棚を設けて神を祀り神聖な場とされている。

神棚には、天照大神を中心に武道の神様と言われている鹿島神宮（建御雷之男神）・香取神社（経津主神）や八幡宮・氏神などを祀っている。

修業の場・湧き水・神木・地鎮祭などにて、しめ縄を張りその場を清め祈るのは、日本の伝統的な慣習であり、このような事が日本人の心を育ててきたと思われる。

道場において稽古前に最初に神前への礼を行うのは、剣道の稽古時や試合時に怪我や事故がないように祈ったり、我々日本人の先祖(神)に少しでも近づこうと努力することを誓ったりするためや、神の前で剣道の試合を行うのだから「正々堂々と戦う事を誓う」や「日々の剣道修業の成果を披露する」など様々な素朴で素直な気持ちを表す礼である。このような気持ちで剣道を修業することが結果的に、相手を「思う」「敬う」「感謝」、「物を大切にする」などの「心」が生じ、そして実行されるのである。

現在の剣道大会は、体育館やアリーナなどの施設で行われることが多く神棚はない。

しかし、剣道の試合を行う以上その場が体育館やアリーナであっても、道場であるという雰囲気をつくるのが大切であり、国旗・連盟旗などを神棚の代わりとして礼を行うことが必要と思われる。

要するに、剣道大会での正面への礼は「大会会長席を中心とした場所」ではなく「神棚を設けている場所」の礼なのである。

V. 結び

剣道には、体育としての価値や他の運動種目には見られない礼法・作法が重視されていて精神的要素や伝統文化的要素が含まれている。剣道(武道)は、平成24年度から中学校教育において必修科目として実施される。剣道が中学校教育で必修科目として実施される目的の一つとして、日本の伝統的な考え方を青少年に武道を通して育てたいということが窺える。

そこで、剣道の礼法で次のことは、統一確立された方が良いと考える。

- ① 剣道の礼法は、直接相手を目の前にして行うことであるから、相手への影響も考慮し一般社会で行われている礼法の指導。
- ② 剣道の作法は、護身を目的にしている直接に相手には影響を及ぼすものではないものであり、伝統文化の一つとして武士の心構えとして指導。
- ③ 道場は、心身一体として修業する神聖な場所であり、体育館で修業するにしても道場であるという雰囲気を作る指導。

「武道は礼に始まり、礼に終わる」と言われるように、剣道においても礼儀作法の確立を行い、相手を「思う」「敬う」「感謝」、「物を大切にする」などの心とこれらを実行できる教育を取り込む必要があると思われる。